

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幅ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No 1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言

新社会党への強い期待、組織・人材づくり急務

河村 洋二……………2

一党支配体制の確立めざす自民党政権

……………3

―「閣外協力」より本格野党が必要―

「ゼロからの出発」強大な党の建設を

……………5

―広島からの報告・総選挙を闘って―

◇『社会通信』の二〇年◇

……………6

労戦再編成、国鉄「分・民」が社会党支持基盤を直撃

滝野 忠……………8

社会党・総評ブロック崩壊の原因はなにか

……………10

―政党と労働組合の関係について―

総パート化をみせつけた「スーパールの女」

……………11

◇労働運動再生を展望して◇

……………13

「酒場労働運動」―酔いどれ社会主義―からの脱却を

町田一男……………14

―障害を持つ労働者の立場から―

◇書評◇「国民経済の黄昏」他

……………15

◇川柳◇―日本は 魑魅魍魎 怪奇島

……………16

読者からのおたより……………13

編集部だより……………13

『社会通信』 本誌の読者をご紹介ください

# 旬刊 社会通信

NO. 653

一九九六年二月一日号

一九九六年二月一日発行  
(毎月一日・十一日・二十日三回発行)

## ■巻頭言■

## 新社会党への強い期待、組織・人材づくり急務

総選挙闘争お疲れさまでした。党員の皆様には格別のご苦勞をおかけしました。また、支持者の皆様、「新社会」読者の皆様にはいろいろとご迷惑・ご心配をおかけ致しました。お世話になりました皆様方に心からお礼申し上げます。と同時に、今後とも新社会党の強化・発展にむけて、ご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

さて、選挙の結果は、小選挙区の河村洋二の得票が一五、四六九票（一三・〇三％）、比例区の新社会党の得票が八、一九三票（二・一九％）でした。非常に短期間（二〇日程）の取り組みであったにもかかわらず、第一ハードルの供託金没収をクリアし、また選挙中に大きな事故もなく、新社会党の存在価値を示す上では一定の評価ができるものとなりました。これ一重に、党員・支持者の皆様の間で協力のためものと深く感謝する次第であります。

わたくしは、この選挙闘争を通じて三つのことを強く実感致しました。その一つは、「やっと思いつきり選挙ができる」という支持者・労組活動家の声でした。ここしばらく職場の声や闘いとかげはなれた指導で、モヤモヤとした気分での選挙が続いていましたが、今回（新社会党）の選挙はすつきりやれるという支持者の活動は、活き活きとしていました。この気持ち力がとなり、短期間の内に闘争体制をつくりあげ、大きな実績をあげた原動力になったと思います。

第二点は、それにしても大きいものだなと思ったのは、「旧社会党」の裏切りに対する県民の批判でした。「社会党はなくなつたのでは?」、「新社会党! 知らんな」、「コロコロ変わる社会党に『新』をつけたってだまされん」という旧社会党支持者に何十人も出会いました。信頼回復の困難さをつくづくと感じさせられました。名前を変えたぐらいではどうにもならないようでした。

第三は、それについても新社会党の組織の強化、人材確保が求められているということでした。「ほんまに消費税アップ止めるんじやな」、「頼むでよ。どなんぞしてよ。」と過疎の在所。街頭演説にも拍手が続く。新社会党への期待は大きい。しかしながら、新社会党の組織や人材は未熟かつ不十分でした。この闘いを通じて、党員や「新社会」の拡大を実現したといううれしいニュースもありました。働く者や労働組合。消費者、市民運動家など県民の期待に応えうる党組織の確立・人材育成が急務です。候補者になって、この点は本当に責任を感じました。

ともあれ、新社会党徳島県本部は、見事なスタートを切りました。わたくしは、今後ともこの党の先頭に立って働き続けることをお誓い致しまして、選挙闘争のお礼に返させていただきますと思います。まことにお世話になりました。ありがとうございました。

(河村洋二)

## 一党支配体制の確立めざす自民党政権

—「閣外協力」より本格野党が必要—

### 自民一党支配への過渡期続く

今度の総選挙で一挙に自民党一党支配体制を確立しようと考えていた財界・保守の支配層にとっては不満の結果となった。それが小選挙区制のもとでは可能であったのに、自民党は過半数をとれなかったわけで、今後保守党と中間政党との間に、一党支配体制確立のための複雑な動きが続くことになろう。

なぜ自民党は過半数をとれなかったのか、それはなんといっても長引く不況に加えて消費税Ⅱ増税に対する国民の不満である。新進党はもつと議席を失うはずだったが、消費税Ⅲ据え置きを政策として掲げたことで一五六議席がとれた（この点で創価学会・公明が活発に動けたところが多かった）。ついでにいうならば、旧公明党系（新進党内の）が五人から三九人に減少したが、それは小選挙区制のため、二四人立候補したが十一人しか当選していない。創価学会は新進党以外の自民（4）、民主（3）、社民（1）、無所属（2）を推せんするなど（推せん全員当選）、自民党側からの攻撃に対応したが、それでも小選挙区制は大きく不利に働いている。

新進党の小沢党首をはじめ羽田、細川などの幹部は保守二大政党を夢見て、小選挙区制をつくつたが、政権交替どころか今後は自民党の半分以下の党になるだろうとみられる。選挙で減少するよりも党内矛盾で分裂の可能性も考えられる。

自民党が過半数をとれなかったのは、経済的社会的矛盾の激化しているときに政権党が大勝できるわけがないということを含めて、野党のだらしなさと社民、さきがけ両党の分裂による無力性に助けられたといえよう。それにしても橋本首相は解散の時期については誤ったといえる。もつと早くか、予算編成後にすべきであった。

### 民主党はどこへ行く

民主党はマス・コミと浮動票に応援されて選挙前に集まった五十二議席を維持した。綱渡りの現状維持である。新党ブームを期待したが「風は吹かなかった」という。新党ブーム“というのはいいかげんなものでマス・コミが作り出すものだが、しかしそれでも条件があった。新党に期待するものが何かあるかということである。前回のときの日本新党やさきがけ（新生党も含めて）の新党ブームは、自民党の長期腐敗の政権党を分裂させ、政府の座から引きずり下ろすという仕事があった。国民は自民党政権がダメになれば政治がよくなると思つた。そこをマスコミがキャンペーンしブームが起きた。民主党にはそれが無い。今は財界とマスコミの一部は自民党の一党支配を望んでいる。国民のかんりの部分も長引く不況のなかで強力な政権党を期待している（マスコミの誘導が大きい）。民主党は、マスコミの寵児（ちょうじ）二人（鳩・菅）を並べて宣伝したが、自民党でもない新進党でもない第三分極という政党といったが、何をやるのかやれるのかを訴えられなかった。進歩性がないのである。そのはずである。候補の大部分が社民党とさきがけからの離脱組の人達でマスコミ受けするフレッシュ性がないのである。消費税5%引き上げに当初から賛成である。唯一の政

策は「行政改革」である。行革は自民党も新進党もすでに公約に出している。しかも支持を打ち出した大労組（全通、全電通など旧官公労）は本音は行革に賛成ではない。現場・職場は「行革」反対である。行革の内容が明確になれば、なお反対が拡大しよう。

民主党はこれからどうなるのか。まず公約は自民党と協力しなければ何もできない。自民党の連立に入れば吸収されてしまう。完全野党にもなれない。かつての新自由クラブの二の舞い、三の舞いになるのではないか。民主党が生き残るとすれば、社民党と合同して組織を固め、当分野党に甘んずる決意と態勢をもつことなのだがそれは無理であろう。下部組織は大労組の支援と議員個人の後援会で対処するつもりのようなのだが、それでは党はもたない。やがて分解することになる。

### 社民党はどうなる

土井党首の出もどりでとりあえず解体の危機は乗り越えたが、危機は依然として続いている。まず第一は自民党との関係である。閣外協力といっているが、協力が多くなれば連立よりも悪い。「反対」が多くなればなぜ野党に徹しないのか、と見られる。十五人の衆院議員では、議会主義政党としての存在感が極めて薄いものになる。これからはまさに「イバラの道」だがどうもこれに「堪え忍ぶ」体質とはならないのではないか。

まず土井党首だが、どうもこの人の理念と考え方に筋が弱くなっていると思われる。詳しくは後日論ずることにして、とりあえず村山内閣の評価だが、彼女は「村山内閣が政権を担当するに際して、これらを修正したこと（旧社会党の先輩たちは左翼の教条に頼ることが多すぎ多くの誤りをやったと土井氏を見る―編集部注）は妥当であったといわなければなりません」（党首就任あいさつ状）といっている。

土井氏は村山内閣の基本政策の転換を認めて、ただ手続き上は問題があったとしている。大筋では、議長に就任したとき、小選挙区制の成立に協力したこと、消費税引き上げに反対の意思を現さなかったことなどから、もう土井氏は革新の旗手としての座をおりたとは思っていたが、こうはつきり云われると残念というよりも、所詮、女権主義の一人の女性議員であったかと思うのである。解釈改憲に流される「社民主義」を強調することになる。このような考え方で行けば理念でも早晚行き詰まることになる。

社民党は生き残ったと喜んでいる人達もいるが、次の参議院選と統一自治体選までもつかどうか。民主党に労働組合がからんで政策上も組織上も混乱は当分続くわけで選挙党・議会議が選挙に負けて議員が少なくなれば維持できないことになる。

### 新社会党の進路

新社会党は選挙では完敗した。しかしこの敗北は予想されたことである。敗因は①党結成後日が浅く、諸準備に不十分さがあったこと、②ことに組織、財政上小選挙区制という最悪の選挙法の下でたたかうには力不足であったこと、③党の宣伝のための大量宣伝活動が不足し、候補者の決定も遅れたこと、など明確である。

逆に云うならば、この小党が反動的オール保守（マスコミもひどい）のなかでよくあれだけの多くの候補者を出してたたかったものだと呼べ得る。敗北感をもつことは少しもない。問題はこれからである。第一に連続した中間選挙、参議院選、統一自治体選挙めざして態勢を整えることである。そのためにも一にも二にも教宣活動と組織活動、そして大衆運動をたたかい続けることである。

（本誌政権研究室）

## 「ゼロからの出発」強大な党の建設を

— 広島からの報告・総選挙を闘って —

衆議院選が終わった。小選挙区比例代表並立制という最悪の選挙制度で闘った今回の選挙であった。衆議院護憲勢力の砦であった、小森・岡崎の両氏の議席を失ったことは痛恨の極みとしか言いようがない。それと同時に自分自身の努力の不十分さに腹が立ってしようがない。そして、この選挙制度では実に死票が多かったことや、小選挙区により多額の選挙費用を要する等々、懸念されていた数々の問題が浮き彫りとなって証明された。しかし、敗北という事実は真摯に受け止めざるを得ない。

今度の展望を切り開いていくため、総括・分析などを直ちに開始し、党建設の強化・拡大を図っていかねばならないわけであるが、各級機関別の総括を徹底することはもちろんであるが、我々、党員一人ひとりの自己総括をしっかりと行う必要があると思う。それはそれぞれが曖昧な総括に終始したり、総括の方向を誤るようなことがあれば今後、党の存亡を左右しかねない状況に陥ると思うからである。例えば、社民戦線が過去、護憲勢力に位置していたことから、当人がなんとか議席を確保したことをもって護憲の議席が一応確保されたから良いではないかとの総括を一部聞くことがあった。そのような回顧的・主体性の放棄に繋がりがかねない発想の総括では旧社会党崩壊の総括・教訓が活かされていくとは考えられない。

社民とわれわれ新社会党はそれぞれ独立した政党であり、党の建て方も理念も異なるからこそ新たな護憲の党としてスタートしたのであるということ忘れてはなるまいし、苦難を承知のうえで勇氣と正義に基づき不退転の決意をした五名の国会議員の情熱を肝に銘じ再確認しておく必要がある。幻想的期待感をもつことは、旧社会党の崩壊過程において既に立証済みであるはず。この点、早急に克服を要すべき課題であるのではないか。また、社民の凋落傾向を過大に評価しすぎた側面も否定できないし、そのことが我党にとつて若干有利に作用するのはとの期待感を込めた見方が一方にあったことは否定できないし、その辺を率直に反省もし総括しなければならぬ。

我々は、三月の結党で時間的なものを含め体制の確立が遅れ準備不足の感は否めないものの、他方で土井復党の茶番劇はあったものの壊滅的惨敗を期すであろうと予想されていた社民党がなぜ、今回の結果に踏み留まったのかということも、他党との分析と併せて行う必要があるのではないか。困難に直面したときには原点に回帰ではないが、同志一人ひとりが結党の原点に立ち返って徹底した議論を多角的重層的に繰り返し、総括し今後の戦略的課題を検討し意志統一を図らなければ展望は拓けない。そのためには、統一された指導体制の確立や、綱領検討委員会での検討結果を基調とした学習活動の強化、全党員の思想性を高揚する作業。また、経験・主観主義によって派生する独善的傾向を防止するための各級機関における交流であるとか、議論の場を設ける体制の構築、そして一方で、党員としての倫理感や同志愛の確立を図り、労働者階級や勤労者の利益擁護に資するための献身的な努力を職場・地域で実践する努力をはらうことなどが従前にもまして求められるのではないか。ともかく地道に、かつ、着実に確かな歩みを進めていこうと決意を新たにしている。

なお、結果として当地方の場合、小選挙区計で十二万票の支持があったことを拠り所として頑張りたいと考えている。非常に厳しい情勢下ではあるが、堺、山川の先人達の歴史や努力に学び、ゼロから再出発し強大な党建設を開始しよう。

(A生)

## ◇「社会通信」の二〇年◇ **労戦再編成国鉄「分割・民営化」が社会党支持基盤を直撃**

ナダレ込んで総評「官公労」は自滅の道を選択

『通信』の二〇年は、総評・社会党ブロック、そしてその政治的表現たる「五五年体制」崩壊の序曲、展開、終焉、そして新たな飛躍への拠点の結成を見、たたかい続けた年月であった。その中でもっとも誇りに思うことは、ジャーナリストとしての取材、活動をつうじ歴史のダイナミズムを身をもって体験できたことである。

国鉄「分割・民営化」で生き方を問われた国労組合員と修善寺大会、小選挙区制度導入論で青票を投じた国会議員、そして社会党員一人ひとりが己の生き様を問われたことだ。人間と人間によってつくられた組織の苦しみ、悩み、そして楽しみを取材しつづけた二〇年であった。

『通信』の二〇年は総評・社会党ブロックの動向を軸に考えれば、おおよそ次のように表現できるのではないか。

序曲 国会議員等への社会党大会の代議員権付与（一九七七～七九年）

第一幕 労戦再編と国鉄「分割・民営化」（一九七九～八九） 第二臨調の発足と国労・総評つぶし

第二幕 第一次政界再編成（一九九〇～九六） 民間政治臨調の発足と社会党の自民党化

第三幕 第二次政界再編成（一九九六～） 旧社会党の理念と歴史的伝統つぶしと総保守体制へのもさく

序曲をなした「代議員権」問題は旧社民連、全電通等の一部大労組幹部の動きとして始まった。社会党大会代議員が非民主主義的に構成されるや、総保守は社会党包囲網づくりに邁進した。その第一幕が第二臨調の発足であり労戦再編成であった。

一九七九年末、鉄鋼労連、ゼンセン同盟が呼びかけたのが労戦再編成、その渦中の一九八二年五月、行政官理庁長官であった中曽根氏は経団連総会でこうあいさつした。

「行革大戦争は日露戦争以来の大きな戦争だ。抜刀隊で一気に切り込んでやれるものではない。潮が満ちてくるようにジワジワ進めていくのが肝心」

これとほぼ時を同じくして、ある宗教団体での講演会で「行革大戦争」の本質を絵解きしてみせた。

「憲法というものは、書かれた文章ではない。憲法を作る力、憲法を自分の憲法にする力、これが憲法そのものであるということをわれわれは知らなければならない。活字が憲法ではないのです。憲法を作る力が憲法なのであります。まず、行政改革を断行しよう。この大きな仕事が失敗したら、教育の改革もできなくなる。いわんや憲法を作る力はダメになってしまう。行革で大掃除して、お座敷をきれいにし、そして立派な憲法を安置する。これがわれわれのコース」

第二臨調の本質は「世論は作るもの」との認識から、臨調行革から改憲の方策を示してみせたことであった。そのため労戦再編成が利用された。

日経連は一九七五年の「大幅賃上げの行方検討委員会報告」以降、総評幹部の洗脳に全

力をつくした。「生産性基準原理」の大宣伝がそれであった。九五年のスト権スト、九八年の全連反マル生闘争の敗北は労組幹部に敗北感を植え付け、労戦再編への雰囲気づくりが完成した。一九八二年の「全民労協」の発足は第一段階であった。

総評労働運動の中心部隊、官公労とりわけ国労に狙いが定められた。社会党の左翼バネは官公労、とりわけ国労。国労を解体すれば社会党の支持基盤を一掃することができる。大々的な国労攻撃が開始された。

今では社民党や民主党の幹部となった友人達と、労戦再編成と社会党のゆくえ、総評・社会党ブロック強化の方策をめぐり連日のように意見をぶつけあった。「労戦再編成なんて実現するはずない」「ましてや国鉄『分割・民営化』なんて」「総評がなくなるわけない」というのが多くの同志、友人、先輩の意見だった。「本当にそうだろうか」という心配に私はとりつかれつづけた。

その理由は、①総評指導部が日経連のマインド・コントロールにやられ、従来の総評運動の路線にすっかり自信を失っていたこと、②経済構造の変化とME化、労務管理が「官」と「民」の力関係を大きく変えつつあったこと、③小が大を飲み込むことはありえないと、総評指導部が労戦再編成に生き残りをかけ諸突猛進をしようとしていたからだ。

私はありとあらゆる機関会議に出席し取材した。現場の声は反対が圧倒的。だから日教組の中央委員会本部原案が一票差で否決されたり、総評拡大評議員会が流会したりなど荒れに荒れ、阻止寸前にまでいったのだ。ところが最後は「運動が大事。中に入って運動で総評の歴史と伝統を守りぬく」とナダレ込んでしまった。

労戦再編成は勝てた戦いだった。「民」はともかく「官」は塊として残すことができた。ところがナダレ込んで自滅した。その最大のポイントが国鉄「分割・民営化」だった。八十年代をつうじ、「民」を懐柔した強圧的労務管理の手法が、権力の政策として展開された。「ヤミ・カラ・ポカ」「国労国賊論」がそれであった。第二臨調は「行革」の中心に国労つぶしをすえたのだ。

国労組合員は本当に強い、これに異存のある人はいまい。国労組合員は「組合民主主義」とはたたかいたるもの」との旧くて新しい労働運動の根本原則をあらためて教えた。その帰結が修善寺大会であった。修善寺大会で国労は総評労働運動の歴史を一段と高いところに引き上げた。

これに全通や日教組が呼応していくれていればと……。日教組は当時「四百日抗争」といわれたが、四百日も組合が機能不全になる異常事態にあった。全通では「会館問題」が顕在化していた。この二つの組合に組合民主主義があれば、日本の労働運動もしたがって社会党も今日の事態を迎えていなかったのでは……。一九八六年同時選挙での自民党三〇四議席が、国鉄「分割・民営化」法案通過、そして総評労働運動総体の右転換を決定的にし、一九八九年連合結成にいたる。

「分割・民営化」では国労組合員一人ひとりが生き方を問われ、道を選択した。「紙ひとえの選択―国労鹿兒島一万分の一の記録」が予想を超えた反響をえることができたのも、全労働者の中に「国労組合員のように生きたい」「生きなければならぬ」との気持ちが生えはじめているからに他なるまい。今、JRと分割・民営化の矛盾は総資本のいちばん弱い環として全面的にあらわれている。国労本隊そして闘争団の辛苦のたたかいが、花開くのもまじかと信じている

(つづく、滝野 忠)

## 社会党・総評ブロック崩壊の原因はなにか

— 政党と労働組合の関係について —

夏は労働組合の大会シーズンだったが、政党からの来賓の顔ぶれや政治方針等を見る限り、かつての社会党Ⅱ総評ブロックの最後の残滓も、いよいよ跡形もなく消えそうである。もはや労組にとつての「政党との関係」は、保守新党のスポンサーとなるか、自民党と直結するか、である。これは連合発足を画期とする、日本労働運動の体制化総仕上げの必然的帰結である。

労働組合との関係における新社会党の進路を明らかにしていくためには、旧社会党時代に労働者党員・活動家が永らく拠り所としてきた、かの「シユトウツトガルト決議」とそれに基づく「社会党一党支持」について、あらためて振り返っておく必要がある。

### シユトウツトガルト決議の要点と総評・社会党ブロックの弱点

「決議」の要点とは、次のようなものであった。①労働階級の完全解放のためには、政治闘争と経済闘争の双方が重要である。②党と労働組合は、片や政治闘争、一方は経済闘争という、それぞれ固有の領域をもち、その領域で独立して行動する。③固有の領域と並んで党と労働組合の一致した共同行動によってのみ成果が達成される領域が存在し、それは絶えず拡大している。④したがって党と労働組合との緊密な関係の確立、永続的な維持が必要である。

かつて戦後革新勢力の中核として輝いていた、社会党Ⅱ総評ブロックは、左派社会党の「平和四原則」に総評が呼応することによってスタートした。そして、安保闘争やベトナム反戦闘争をはじめ、職業的利害、労働・生活条件の維持改善にとどまらない政治闘争をも闘ってきた。この出発点と闘いの前進の過程は、「決議」の精神を見事に具現していた。しかし、「安保と三池」以降資本の職場支配が総評中核部隊の中へ浸透していく。これと並行して、世界にまれなる戦闘的社民政党であった日本社会党も、議会における労組の利益代表、交渉仲介者の役割と、労組幹部の議員への道を確保する存在としての傾向を強めた。

このような中では「決議」は、官公労を中心にいせいで共産党対策の「理論武装」としての、タテマエと化していたのではなかったか。共産党系労組との「統一」解消を意味する総評解体Ⅱ連合発足は、それをも用済みとするわけだが、それ以上にソ連社会主義の崩壊は「決議」のタテマエ的尊重さえも葬ることを促進した。そして、今や労組を自らの支持母体にとりこむことを渴望してきた自民党との連立政権がすべてを白日のもとにさらした。

### 山川均の指摘

「シユトウツトガルト決議」について続ける。この決議は、戦争の暗雲たちこめる一九〇七年に開催された、第二インターナショナル第七回大会で決定された。「労働組合の政治的中立」を批判するための決議であったが、成立にあたっては労組側（特にドイツ）へ



の譲歩を伴っていた。「労働組合と党组织との間の関係が緊密であればあるほど、プロレタリアートの闘争はますます有利」とする一方「その際には労働組合組織の団結が重視されなければならない」。また、闘争戦術において「意見の相違が存在する場合には、党と労働組合は、意見の疎通をはからなければならない。」という規定が背景を物語っている。山川均によれば、労働組合と政党との関係は四つに類型化される。①狭義の労働組合主義（職業上の利害という狭い範囲に閉じこもっている組合運動）、②平等の権利に立った協力関係、③政治運動の否定、またはこの思想に基づく政治的中立の立場、④経済闘争と政治闘争との結合された状態、である。

言うまでもなく「シユトウツトガルト決議」は④を指向している。しかし、「シユトウツトガルト大会のマルクス主義的な決議に基づいていようと」当時のドイツの党と労働組合との間に「実際に実現されていた関係」は、①の延長上の②だと山川は喝破する。

「一方では、職業的利害のための闘争というもつとも初歩的、原始的な労働者の階級闘争から、もつとも発展した階級闘争の形態たる政治的階級闘争まで貫いており、この二つのものが接続しており、そしてこの一方から他方への、勢力の変換と伝達とを任務とするところの労働組合の本来の行動領域を、ただたんに労働条件の維持改善を目的とする闘争の範囲ないしは段階を断ち切ってしまう、また他方においては、社会主義党の行動領域を、ただたんにブルジョア議会で実現のできる改良的立法を獲得するための闘争の範囲、ないしは段階で断ち切ってしまう、そしてこの二つのものをくらべるなら、この段階における組合の経済闘争と政党の政治闘争とは、ひっきょう、労働生活の条件を維持改善するための闘争の、ただたんなる分業であって、組合の経済闘争と政党の政治闘争とを『結合』するということは、要するに組合と政党とが、平等の立場において協力することにほかならぬ」（一九二七年「労働組合と無産政党」）

われわれに欠けていたもの

我々は「決議」に依拠しつつ「社会党一党支持」を擁護して奮戦しながら、かかる問題を十分自覚してこなかった、という他はない。

いかに「シユトウツトガルト決議」の思想で擁護されようと、社会党一党支持の決定が形式化していた、形骸化していたことは、相当長きにわたり放置されてきた問題である。ここにいう〈形式的〉には、二つの角度からの論点がある。第一は、党と労働組合の関係が、「決議」の求めるような階級の内実を欠いていたことであり、第二は、機関決定が個々の組合員のものとはなっていないなかったことである。

前に引用したとおり「決議」の思想は、「労働者階級の完全解放」のためには、経済闘争・政治闘争の双方が重要であり、労働組合と党はそれぞれ固有の領域とする、ところから出発する。つまり「公正な賃金」にとどまらず、「賃金制度そのものの廃止」を旗印とする労働組合運動が想定されていたのである。

労働組合運動自体が狭い職業的利害や改良主義にとどまっている限り、党と労働組合の正しい関係は築けない。したがって、この問題は党強化とともに階級的労働運動の再構築が車の両輪として有機的に結びつけられなければならないのである。

総評労働運動が解体することなく、日本社会党とともに階級的前進をかちとる条件は七〇年代半ばまではあった。七〇春闘総評一五大要求に端を発する国民春闘路線は、職業的利害や、経済的要求を超えて、未組織労働者や勤労諸階層の要求をとり上げ総体としての労働者を構造的に代表し、反独占闘争としての政治ストをも闘い得るものであった。

しかし、それが「労働者階級の完全解放」にむけて統一戦線政府樹立とともに戦略的自覚的に位置づけられ、一人ひとりの労働者のものとなる前に、資本の巻き返しに屈したのである。総評執行部の中で労働者の社会主義的政治教育の構想が日の目を見ることなくつぶされたのに対し、日経連の側は今日に至るまで労問研報告により思想的に統一し攻勢をかけてきたのである。

他方、組合員一人ひとりの思想的前進が保障されていないということは、幹部請負主義やモノ取り主義、指令指示待ちの作風を固定化してしまうことと表裏一体であり、機関決定としての「社会党一党支持」が宙にういてしまう土台であった。

新社会党と労働組合との関係は、この二〇年の闘いの総括に立ち、ともに労働運動の再構築に奮闘する過程のなかからしか生まれてこない。

(U)

## 総パート化をみせつけた「スーパーの女」

伊丹十三監督の、「スーパーの女」が上映中である。威勢の良い宮本信子演じる主人公が決めるせりふに、今まで何度わくわくしてきたことだろう。

今回は幼なじみが経営するスーパー「正直屋」を立て直すことが、物語のテーマである。魚から赤い汁、しなしなの野菜、売場はゴミだらけ：「あーだめだめ。よいスーパーは商品が買って買って言うんだよ」威勢の良い啖呵は相変わらず健在だ。

スーパーとは本来セルフサービス方式の総合食品小売店のことを言うそうだ。ダイエーやジャスコはビッグストアーと言ひ、別のジャンルだそう。スーパーは生鮮食品が中心で、売れなかつたら腐るといふ宿命を持っている。回転する↓新しい↓売れる方式を追求しなくてはならない。長持ちさせる商品管理、客数に応じた仕入れ、作業場での効率化（魚や肉の仕分けやパック詰め）が鮮度を保ち、売り上げにつながるという訳だ。

「正直屋」に対抗する「安売り大魔王」のように安かろう悪かろうの店もある。輸入肉を和牛と表示したり、売れ残った魚を日付を変えてパックするなど、日常茶飯事だ。さあ、正直屋はどうするか。鮮度を保つために、作業場の効率化を図る方法を取る。

魚や肉の加工に流れ作業を導入するのだ。人件費のかさむ職人さんをやめさせ、パートを主力にする。パック詰めで雇われたのに、魚の裁き方から、お総菜の開発まで動員される。人件費の節約と労働強化をして利益が生み出されていくことを、まざまざと見せつけ、総パート化を見事に表していると、言えよう。しかし映画は「お客さんのためにスーパーがある」と宮本信子に言わせて終わる。伊丹さんに一言いいたい。「労働者はいったいどうなるの」、すっきりしない映画だ。

(宇野 陽子)

◇労働運動の再生を展望して◇  
**「酒場労働運動」「酔いどれ社会主義」からの脱却を**

障害を持つ労働者の立場から

わたしのテーマ

わたくしは、民間企業で働く障害を持つ労働者です。労働組合は、コミニティ・ユニオンに属し、またプライベートタイムには、障害者のノーマラーゼーションを実現する障害者のサークル活動なども取り組んでいます。

コミニティ・ユニオン加入十年目を経て、わたくしの労働運動のテーマは、障害を持つ仲間の闘う核造りです。今、一人の障害者の加入を実現し、もう一人の障害者の加入も間もなく実現の見込みとなりました。

今日、この「新社会党労働委員会全国交流会・労働運動の再生を展望して」の呼びかけパンフレット「新社会党労働政策要求十項目(案)」に、「障害者の人権確立に向け、法定雇用率の達成、公的支援の強化・拡充を実現します。また、在日外国人の権利確立、未組職労働者に対する支援を求め、労働行政の改善・強化をめざします」とある事に、勇気を鼓舞されました。わたくしはここにお集まりの全国の仲間に、障害を持つ労働者、また、コミニティ・ユニオンの立場で、意見を述べさせて戴きます。

下請けいじめと大企業労組

皆さん、総評が未組職労働者や障害を持つ労働者の組織化に取り組んで来たと言えるでしょうか？わたくしたちの立場で言えば、「ノー」です。

闘うスローガンとして掲げてはいても、民間・官公庁の別なく、仕事の外注化、職場に非正職員身分の職員や派遣の人びとが導入され、そして、増え続ける中で、仕事を縦軸とした労働者の管理・監視システムの中で、自分と自分の属する労働組合の権利の擁護に狂奔していた事が、労働運動と錯覚し、総評の解体、労働運動の右翼的再編成の芽であったと言えるのではないのでしょうか？

明治開闢以来、わが国は欧米先進国に追いつき、追いつ越のキャッチ・アップを国是とし、権力をこの目的遂行の為に維持・強化し、産業は輸出産業を頂点に、産業構造のピラミッド型を構成する事で、経済強国を造って来ました。この国是の下、司法・立法・行政は資本に奉仕し、労働者層をこの権力構造の中に取り込む事、つまり、労働組合の資本参加・会社主義を生み出し、結果として、総評の解体に繋がったと、わたくしは思います。

この事を、身近な問題として職場で見ると、協力会社と言う名の下請けを形成し、同じ職場に身分の異なる非正職員や派遣の人びとが溢れ、わたくしたちは日々の職場の中で、これらの人びとにどのように接しているのでしょうか？ 過重な仕事、嫌な仕事、無理なコスト削減の要求、タダ酒の強要、人格的な攻撃など、仕事の縦軸の上位に位置する労働者が、無理難題を縦軸社会の下位労働者に押しつける恥ずべき行為に無頓着になってはいないのでしょうか？

かつて、わたくしが町工場の生産管理と言う仕事をしていた時、親会社の担当者、この会社の労働組合は、産別の中で、闘う労働組合として有名な労働組合でした。この労働組合の執行委員が、先に述べたような事を、平然と要求した時、わたくしは啞然とし、仕事の縦軸を無くさないよう奔走致しました。また、現在の職場では、出版関係の業務ですが、

出入りの業者、職員の方々は、嘱託身分のわたくしと話すのさえ神経をすり減らし、仕事の確保に懸命となっています。

### 疎外と孤立の働く障害者の職場

また、障害を持つ労働者で考えると、まず、総務庁が出している「平成七年版・障害者白書」では、一般の民間企業における障害者の雇用状況は、従業員六三人以上の事業所五万四四一四カ所、常用労働者数一七〇七万六八〇七人に対し、法定雇用率一・六%が一・四四%。実雇用者数では、一八万八一三八八人（重度障害者のダブルカウントでは二四万五三四八人）となっています。また、国、地方公共団体の障害者雇用実績は、一部を除いて前年を下回るものとなっています。中でも、教育現場では、養護教育の現場以外では、障害を持つ労働者の比率は驚く程の低さです。就労の現場では、障害者一人ひとりの障害による個別事情は省みられず、法定雇用の枠内雇用の向上のみが強調され、職場環境は整備されず、働く障害者の現場での疎外・孤立を招いています。

障害者の就労の具体的な話は、「翼」の名で「週刊・新社会」の紙面・第六面で、来る十月一日（火）付け号から、「障害者就労の現状」の十二回シリーズとして、取り上げられますので、この場での報告は割愛させて戴きます。

しかし、わたくしの経験で言えば、法定雇用による公的援助の悪用に長（た）けた中小零細企業での劣悪な労働条件、加重労働、人格的攻撃に脅えた日々。さらに、現在の職場では、行政の強い雇用要請を受けて、雇用した障害者を飾り者的扱いに終始しています。また、わたくしの場合、入社の時、編集資料の整理と言う業務で「嘱託・一般事務職・庶務社員」の身分であったのが、会社の都合で、出版物の販売と言う極めて専門性の高い分野への職種転換を一方的に強制され、社内身分の専門嘱託の立場を勝ち取るのに三年を有し、今なお、会社の障害者嘱託社員の差別的雇用の改善を目指して、わたくしはさらに闘っているところです。しかし、職制は、「定年まで居たければガタガタ言うな」と恫喝を掛け、会社側の対応は、わたくしへの仕事の指揮・管理システムを強化する事で、大きな障壁を作っている有り様です。

### 家族ふくめ小さな団結体が不可欠

さて、ここにお集まりの皆さんの中で、奥さんの組合活動を認めている方は何人いらっしゃるか？ スローガンとして、未組織労働者の組織化と掲げてはいても、実態として、わが家の問題として、パート等で働く奥さんの労働組合参加、パートユニオン加盟を認めている活動家は、大変少ないのが現状だと思います。スローガンを實現するには、民間・官公労の別なく、労働組合が労働者の監視と管理機能を強化する中、組合内で圧倒的少数派となったわたくしたちが、職場で運動の正当性を主張し、粘り強く抵抗すると共に、家族ぐるみで闘う体制を造らなければ、闘いの輪は大きくはならないと思います。

さらに、今、わたくし達は少数派とは言え、組織された労働者として、未組織で闘っている人びと、闘う核造りに取り組んでいる人びとに対し、上から物言う姿勢は、厳に謹んで戴きたいものです。未組織労働者は、地区労解体後、会議一つ開くにも場所の確保すら難しく、また、経済的に大きな負担を余儀なくされているのです。わたくし達は、未組織労働者を遅れた人びとと見るのではなく、山積する矛盾と捌け口のない怒りの苦しい日々の中で、懸命に生きている人びとと捉えるべきではないでしょうか？ わたくし達の役割は、問題の本質を提起し、出来る限りの支援と連帯を続ける事が求められていると考えて

います。

かつて、わたくしが旧社会党の総支部書記長時代に、地域の総合病院の従業員から、市議員を通して労働組合作りを相談されました。この時、わたくしの懸命の説得にも係わらず、総支部として出した結論は、「医労連は共産党支持だ。利用されるだけだから止めよう」でした。私鉄総連に組織された党員の多い地域総支部でしたが、この決定に愕然とした事を思い出します。

これからの労働運動を展望した時、わが国の産業・経済は、バブル崩壊後、キャッチ・アップの国是がボトム・アップへと変化し、リストラによる労働者・国民各層への齧寄せと切り捨てが日常化している中、労働者・国民各層の不満や不安は高まっています。しかし、連合の発足に端を発した戦後処理は、オウム真理教事件を契機に破壊活動防止法の適用と、これからの政治・経済の重要な課題とされる持ち株会社の解禁で、一応、新たな戦前への翼賛体制の完成を見ると言えます。今、わたくしたちの役割は、歴史的にも大きなものとなっています。

#### 会社、職場主義に安住するなかれ

労働運動の再生は、わたくしたちが仕事の縦軸、つまり、会社・職場主義に安住する事なく、下位労働者に配慮し、障害を持つ労働者をはじめ、女性や外国人労働者等の人権と権利を守る事によって、組織率二十五%を割った右翼的労働組合運動を、包囲する力を造る事が、取り組む課題であると考えます。

わたくしは、かつて、組織された労働者が、酒場で闘う労働組合運動を声高に話し、酔いどれの中で社会主義を話す姿を何度も目にしてきました。しかし、今、彼らは連合に安住し、社民・民主党に寄り掛かっています。最後に、わたくしは皆さんに申し上げたいのです。「酒場労働運動」、「酔いどれ社会主義」から脱却し、「いきいき」とした「労働運動の担い手」になつて戴きたいと。わたくしも頑張ります。社会の矛盾の集中する障害を持つ労働者として…。

(町田 一男)

### ◇ 編集部だより ◇

先日、巨大製鉄所を見学した。四千三百立米の溶鉱炉と熱圧延装置のホット・スプリット・ミルだ。巨大な装置が人間を見おろしている。すさまじい迫力にまず驚かされた。日産一万トンを超えるという。工場のどこにも人がいない。すべて自動化されている。巨大な溶鉱炉は五人の正規労働者と二人の下請労働者の七人で動かされているとのこと。交代だから二人だ。ホット・スプリット・ミルは六人とのこと。鉄の塊があつという間に圧延される。これも三交代だから一八人。案内してくれた現場責任者は、これまではこの装置はまだ人間の入る余地がありオペレータと呼んでいた。今ではパイロットと呼んでいると説明してくれた。すべて監視労働者というわけだ。私の頭にあるのは工長、作業長、総作業長といったかつての鉄鋼労働の職務機構だったが、職場はすっかり変貌している。現場が徹底的に合理化されているとの印象が脳裏に焼きついていた二九日の各紙は、「新日鉄、技術職と主務職区分撤廃を発表」と新たな合理化策が提案されたことを報じた。時代は新たな段階に入る様相を強めている。それにともない『通信』の役割も変化し、大きくなっています。『通信』についての「意見をぜひお聞かせ下さい。いつものお願いです。原稿寄せて下さい。さらに読者をご紹介ください。よろしく！」

## 書評

「国民経済と黄昏」（岩波、宮崎義一）「多国籍企業」（岩波、宮崎義一）「世界経済入門」（岩波新書、西川潤）「世界経済の新しい構図」（岩波新書、向寿一）

多国籍企業は、いまや全世界の魔王である。一国の国家財政を越える巨大企業が、全世界を走りまわっている。環境を破壊し、村落を解体し、労働者、農民を抑圧し、搾取している。宮崎義一は、「現代日本の多国籍企業」（岩波）で、その実態を解明したが、八一年出版で、旧くなった。日本巨大企業の海外投資は、八五年、プラザ合意、円高により堰を切ったように噴出した。フォーチャン五〇〇大企業ランキングでは、米企業一六七社に対し、日本企業は一一一社、いまや、日米巨大企業が全世界を支配している。（世界経済の新しい構図、向寿一、岩波新書）

西川潤は、世界経済入門（岩波新書、第二版）で、「多国籍企業と国民経済は原則的に矛盾関係にある」として、その内容を分析する。宮崎は「日本経済の黄昏」（朝日選書）で、「いまや、国民経済の枠組みはこわれ、広域経済に転換しつつある」と説く。この一大転換期、興味のつきない、面白い本が続々出ている。

「枕草子」（清原元輔の娘著） 自分が感動を覚えない死んだ内容は、どんなテクニクをほどこそうとしても、他人に伝わるわけがない。我々の運動は、いつのまにか、内容を失って、形ばかりに気を取られる事務的・官僚的なものに陥っていたようだ。枕草子を手にとって、読むほどに思うのは、日常生活の中に、こんなにも敏感に感じられるその主体側のすばらしさだ。五感を目いっぱい開いて、全てから外の世界を感じ取ろうとする清少納言のみみずしさである。

「サルからヒトへの物語」（河合雅雄、小学館ライブラリー） 食虫類から進化したサルの中で、虫喰いのへたなサルが競争に敗れ、果実喰いへと押しこめられた。やがてこの、果実喰いのサルは葉も喰いはじめ、体格も大型化し、繁殖し、虫喰いのサルよりはるかに個体数を増やした。この虫喰い競争に負けたサルが人間への道を歩み始めることになる。何だか、当面の競争には敗れたグループにとつて参考になりそうな話である。しかし、それは必死のジャンプをやつてのけた者だけの果実だ。

「アルプス登攀記」（岩波文庫上・下 ウィンパー著） ヨーロッパアルプスの切っ先マッターホルン。どつちにせよ登りにくそうな山の稜線だが、麓から見ると、よりなだらかな方を選ぶのは人の常。しかし、現場は巨大な岩が行手を阻んでいた。何度かトライして失敗した後、ウィンパーは、反対側のより険しいルートに挑戦した。そこは雪の吹きだまりで氷ができていて、アイゼンを突き立てて進むと、格段に登り易いところだった。人はえてして易きに流れるもの。発想の転換が成果をうむ。

「クオヴァアデイス」（岩波文庫 シェンケビッチ） トロイ戦争を描いたホメロスのような詩が書きたい一心で、ローマに放火した皇帝ネロは、宗教的には古来の多神教信者であり、当時ローマに進出してきたキリスト教を弾圧した。カルタゴとの地中海覇権競争に勝利してからのローマは、富を集中したため、権力も集中し、共同体成員は貧富に分解した。キリスト教は抵抗する者の宗教として、地下に根を張った。闘う宗教だった時のキリスト教信徒の生き道を示した感動の長編小説は一押し。

川柳

もう沢山 くち先だけの 公約は

国民は あきれ、怒っているぞ

どの党も にわか公約 民あわれ

選挙の時だけ リップサービス いい加減にせい

おたかさん マドンナブーム もうないよ

勇気はよし が かつての勢いなし

おたかさん 山はふたたび 動かない

二匹目のどじょうはいない

残るのも 行くのも地獄 政治地図

右往左往は みつともない

選挙さえ とおれば口約 くそくらえ

政治家の質が ほんとに落ちた

比例制 生き返るのは 古狸

老獪な奴が居残る選挙制度

死ぬ死ぬと いうてほんとに ひと死なず

小沢も西岡も 辞める辞めるといつているが 腹はみえてる

この選挙 活党死党 わかれ道

各党の運命いかに 大体みえてるが

よーわからん 新制度 コスタリカ

小選挙区で 街なかに妙な線引き

てやんでえ 民を騙さず 官をうて

てやんでえ 四の五のいわず 投票でえ

国民は怒りつつも クールでえ

マルクスは いつも超えてる 世界観

達人はやっぱり違う 政治家ども 爪の垢でも吞め

鬼か蛇か 銭を喰らいつ 暗走る

公約を うそぶき乍ら 餓鬼がゆく

どのような表現でも言いつくせないほど この国の政治は墮落した 恐ろしや でも 希望を持とう 虞山人

## ◇ 読者からのおたより ◇

拡大します 二部お願いしておりましたが、別々に郵送していただけませんか。有料購読をしていただけるようになった方が、組織の責任者として組織購読を決め、学習資料等に「社会通信」を使われるそうです。さらに拡大して下さいるものと思います。(鹿児島・N)

編集部より 嬉しいお便りありがとうございます。二〇年め楽しい門出となりました。乞う拡大。到着が楽しみ 誌代の払い込み遅れ申し分けありません。毎回届くのが楽しみです。(神戸・K)

編集部より 岡崎さん残念無念。さらに内容豊かな「通信」にしたいです。拡大しました 十月より一部拡大しました。「週刊新社会」読者拡大と合わせ努力します。(千葉・T)

編集部より 拡大心から感謝。新しい情勢、「通信」の充実に努めます。ご支援を。明るく元気に 音威子府闘争団は変わらぬ明るさと元気でがんばっています。(国労・S)

編集部より 十月二〇日の国労まつり盛会でした。久しぶりに全国の闘争団の仲間と対面。元氣いっぱいですね。いよいよ正念場、闘争体制の再確立を！私も努力します。真の社会民主主義政党政出現はいつ 土井さんの動きで社民党はどうなるんでしょう。それと連動して新社会党やその他は？ 何がおこるかわかりませんが、まだしばらく「通信」を購読します。早く真の社会民主主義政党政が出現するといいいのですが、「通信」にそれを期待するのはムリですよネ。(大阪・M)

編集部より ご購読、多謝。世界はすっかり様変わり。真の社会民主主義政党政が必要ない時代かも。力合わせがんばろうよ。貴誌の活躍を期待 二〇年おめでとう。貴誌のご活躍を期待しています。(神奈川・J)

編集部より 二〇年も続けられるとは。Jさんから読者の皆さんのおかげ。ありがとうございます。平和と民主主義の危機 総選挙が終わりました。まさに平和と民主主義の危機です。何を編集軸に改憲阻止勢力を結集させるのか。もう今までの行きがかりを言っている時間はないと思います。「通信」で方針を示して下さい。(私鉄・M)

編集部より 過日、ある読者から「新社会党をつくったのは裏切り者だ」と、社民黨員から言われたとの話を聞きました。どちらが「裏切り者」かはともかく、だれがこんな状況にしたのが重要だと思います。悪口雑言をいいたてるのはやめたい。大同団結忘れまい たいへんでしょうが、がんばって。仲間の大結集への努力をお願いします。大同団結を忘れないようにしたい。一本の筋を守りながら。(岐阜・N)

編集部より 旧社会党を分裂させ、五五年体制を崩壊させたのは自民勢力です。敵を見失わないようにしなくては。厚い自民党の壁 総選挙闘争勝利のためじつに様ざまに努力しました。自民党の壁は厚いというのが実感です。まずは組織力、そして民意をどうつかむかです。小手先の手法は通用しないというのが、今度の総選挙をたたかっただけの教訓です。(北海道・S)

編集部より 選挙戦はさまざま変わりしたという他ありません。政治不信が選挙戦を圧倒していたからかもしれません。十二日間、選挙の雰囲気はほとんど皆無でしたから。地方選たたく条件でできた 私の市では新社会党の比例投票で、若干プラスさせれば市会議員一人を擁立できる票が出ました。生命がけでやった選挙でなかったのには。新社会党に新たな展望を見た。(北海道・S)

編集部より 新社会党の比例区の投票総数は百万弱。生まれて半年の政党にしては大勝利。この地盤を次にどう前進させるのか。一人でも多くの議員つくってよ。

「通信」もこれからがんばって 私たちの県では、新社会党一〇%条項をクリアしました。「五五年体制」がくずれ、「通信」が問われるのはこれからです。がんばって、私たちの道を示して。(徳島・F)

編集部より おっしゃる意味、自覚しています。新たな出発、がんばります。ご支援を。

編集部より おっしゃる意味、自覚しています。新たな出発、がんばります。ご支援を。